「おさしづ」語句の探求（43）

「おさしづ」第６巻における刻限／本席身上伺と「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第６巻（明治35～40年）の「刻限」と「本席身上伺」における「道」の用例を整理する。第５巻までは刻限と本席身上伺を別々に整理してきた。しかし、第６巻では、本席の身上の障りをきっかけにして「刻限」の「おさしづ」となる場面が多く、また、本席身上伺は刻限と同様の位置を占めるとされることから（『天理教事典 第三版』「刻限話」の項目参照）、今回はこの二つをまとめて取り上げることにしたい。

第６巻には刻限と本席身上伺の「おさしづ」があわせて47件ある。そのうち、「道」が用いられるのは33件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは18件である。

第６巻に集録されている「おさしづ」は207件（巻末の教会事情除く）あり、年平均にすると約35件と、これまでの巻にくらべて格段に少ない。そんな中、特に明治40年に刻限と本席身上伺の「おさしづ」が多く、この年の「おさしづ」の半分以上を占めており、ほかの巻にくらべてその存在感が際立っている。

そんな事でこの道どうなるぞ

第６巻の刻限／本席身上伺を「道」の用例に注目しながら読むとき、強い印象を受けるのは次の「おさしづ」である。

「一万二千足らんと聞いた。そんな事でこの道どうなるぞ。これでは働けるか働けんか。さあしっかりせい。教祖にこの道譲りて貰ろたのに、難儀さそうと言うて譲りて貰うたのやない、言うて居た日あるのに、何と呆けて居る。……道は、皆継目あるで〳〵。継目知りて居るか〳〵。知らずに何と呆けて居る〳〵。皆んな取損いして居る〳〵。教祖という道内から潰して居る。世界の道で立ってあるか〳〵。学問で立つと思うか。」（さ40・3・13　平野楢蔵とお話しありし時、俄かに刻限の話）

このようにかなり厳しい口調で、現状に対して叱咤激励されている。ここで「道」について注目すべきことは、「この道」は教祖から譲って貰ったもので、教祖の道を受け継ぐべきものであり、それは、「世界の道」や「学問」、つまり、社会の常識とか世間の論理とはまったく異なったものによって成り立っている、ということである。

この道というは、一つ理という

それでは、「この道」は何によって成り立つか。それについて、「一つ」という言葉を用いて説かれる場面が多い。

「一つ理を治めば、何も言う事無い。神の道望み、神直（す）ぐ一つの道に、横道通るからどうもならん。」（さ38・5・11　本席身上御障りにて声出ずに付願）

ここでは「一つ理」を治めること、あるいは「神直ぐ一つの道」を通ることが大事とされ、「横道」を通ることが戒められている。この「おさしづ」から数日後、その「横道」とは一体どういうことなのか、あらためて伺われている。

「この道というは、一つ理という。皆んな一つの理である。一つの理というは一つの心、一つの心ならこそ、これまでの道という。これから先はなか〳〵の道、容易ならん道である。容易ならんと言えば、どうなろうと思う。よっく聞き分けにゃならんで。これまで外の事にて、あちらこちら取り混ぜのようになったる。それを横道と言うのやで。……神の道は直ぐ。一つの道は神の道。」（さ38・5・16　過日のおさしづより一同相談致しまして、……尚横道という処をおさしづ下され度く願）

「この道というは、一つの理」と言われる。また、「一つの心」とも言い換えられている。これは、単に複数の心をあわせて一つにする、ということを意味しているのではなく、皆がそれぞれに「一つの理」ないし「一つの心」を治めることを諭されている。「あちらこちら取り混ぜ」になるのを「横道」と言われる一方で、「一つ」というところを心にもって、一筋に歩むのが「神の道」であると説かれている。同様の用例には、「国のためと言うて、存命果たす者もあろう。又この道というは、尚も心一つに治めてくれにゃならん。」（さ37・11・2　本席身上御障りに付願）というものもある。

教一つの理から年々に道

その「一つ」というものが何であるのかについては、次の「おさしづ」に示されている。

「初めは軽き些かな心を伝えて道出けたもの。一時初めから一分始終出けやせん。よく聞き分けてくれ。これまでの道容易ならん道、教（おしえ）一つの理から年々に道出来て来たる。よう聞き分けにゃならんで。これがいかん、どれがいかん、教一つの理を放って了（しも）て、世界一つの理取り運び、通ろうと思たて通れやせん。」（さ37・7・27　本席身上御障りに付願）

ここに端的に記されているように、この道は「教一つの理」によって、年限かけて徐々にできてきたものである。したがって、「教一つ」を放っておいては成り立たない、通れない道なのだと説かれている。また次のようにも言われる。

「最初掛かりから四十四五年。この事見れば、今は勇んで跳び上がってするようなもの。一寸困難、困難の筈や。人が知らんから困難。困難の道無くばならん。その時見て先になったらこう成る。何処から何処までこれだけなあ〳〵、追々に出来たるその時から話しある。往還の道や。秋了（しも）うたら楽しんで。この秋やろうか〳〵、秋を合図に出て来る。もうやろうかどうやろうか言い〳〵随いて来たるは今の道や。これさえ忘れねば案じる事要らん。」（さ40・5・30　午後10時　本席御身上又々激しく相成り、刻限の御諭）

まだ、より来る人もほとんどいないようなときから、教祖は先の「往還の道」を楽しみに歩みを進めるように教えられた。その教えを頼りに、「もうやろかどうやろうか言い〳〵随いて来た」。それによって何万という人が集う「今の道」があると言う。

ここに、この道の歩み方が諭されている。一般に「道」という言葉は、ある方向へたどり行くというニュアンスを持っているが、「この道」は教祖の「教一つ」を頼りに、その方向へとたどって行くことによってできてきたものである。したがって、これからも、その「教一つ」を求めて一筋に歩みを進めることによってのみ「道」は続いていくのである。こうした「道」の要点が、第６巻の刻限／本席身上伺の用例から読み取ることができる。